

## キムチバーガー娘

村松 いづみ

カサ デ オリーバ（オリーブの家）に、天使が迷い込んだ二ヶ月間、それはボランティアセンターからの一本の電話から始まった。

当施設（カサ デ オリーバ）は、精神障害者社会復帰訓練施設で精神障害ほか、障害をもたれる方々が作業訓練を行っている。三階建ての建物で、二階・三階では軽作業、一階では店舗形態の作業（喫茶店）を行ない、地域密着型のガラス張りの施設として少しずつ認知されてきた。また、精神障害者の理解への啓発と障害者の方々の対人関係、社会参加を図る上での訓練として、来店されるお客様は勿論のこと、企業・学校・地域市民の企業実習・研修・ボランティアを随時受け入れてきた。

そのボランテイアセンター職員からの電話は、少し困った様子で、「ボランテイアを一名受け入れて欲しいのですが、韓国生まれでNY育ちの女性で、夏休みを使い日本語の勉強にいらした方です。滞在中は、日本の大学に在学中のお兄様のアパルトにステイされています。今までにボランテイア経験は一度。アメリカでダウン症の子供さんたちのボランテイアに参加されたとのこと。日本語があまり：多分：ほとんど出来ない、解らない方なのですが、受け入れて頂けますか？」との話だった。

その時私は、以前当施設（オリーブ）に関わって下さるボランテイア等のために、英語と韓国語で作成した、施設・障害者についての説明やボランテイアの心得なる文章がパソコンのどこかに眠っていることを思い出した。「今からFAXする文章を読んで頂き、ご本人が納得されれば受け入れます。」と伝え、彼女のボランテイア受け入れが決まった。

数日後、ボランテイア初日、約束の時間に来ないため「言葉の壁？今どきのアメリカ育ちの若者のルーズさ？ボランテイア以外に楽しいこと見つけたのかな？それとも迷ってるのか？事故？：」と、諦め半分、心

配半分で仕事に追われて忘れかけた頃、その天使は息を切らし汗を拭き拭き飛び込んできた。「ゴメンナサイ、ゴメンナサイ：」と、何度も頭を下げながら繰り返し返した。「You can speak Japanese?」と聞くと「No!」「ゴメンナサイ」と、ペコペコ頭を下げた。彼女の名前はEuniceさん。彼女が辛うじて書いた名前の振り仮名に「インジ」と記されていたため、私たちはインジさんと呼ぶことにした。

職員やメンバー（障害者）と話し合い、「ゆっくり、解りやすく、正しい日本語、単語で二歳くらいの子供に言葉を教えるように話そう」と決めた。

オリーバには、フィリピン国籍で英語も話せるRさんという方がいて、彼は総合失調症の治療のために三年前からオリーバへ通所し通院をされている。通訳として頼りになるはずだった彼は、この時期とても精神面でダウンした状態が続いていて「頭の中で日本語を考えたり、人と話すことがつらい。ダルい。何もやる気が起こらない：」等、うつ状態だった。主治医と連絡を取り合い、薬以外の環境の改善、気分転換等、彼の

気持ちを引き上げる「何か」を模索していた時だったので、「そうだ！ Rさん、あなたは今日からインジさんの日本語の先生よ！なるべく日本語で話して、解らないことや言葉の意味を英語で説明してあげて下さい」と持ちかけた。彼は無表情で「ハイ」と答えた。明るく屈託のないインジさんは、Rさんの病状など知るよしもなく質問を浴びせた。うつ状態だったRさんは日に日に笑顔と言葉を取り戻していった。

総合失調症、発達・知的・適応障害、うつ病ほか、オリーバに通所する方々は社会的機能が欠如しており、症状によっては強い薬で脳神経をブロックし、感情鈍磨・無為自由といった特徴があり、対人関係の図り方、会話のキャッチボールを苦手とする方が多い。そんなメンバーにとって外部からの来訪者との関係を築くには、我々の想像をはるかに超えた緊張と時間を要する。ましてや言葉の壁は大きな障害となるはずだった。ところが、インジさんとの会話は、接続語を使わず単語のやり取りに始まり、変な日本語といつもニコニコ笑顔を絶やさず快活で人懐っこいインジさんに、メンバーだれもが構えることなく接してゆくことが出

来た。

インジさんが来て間もなく、オリーバの年一回の大作事「スマイル福祉まつり」がやって来た。この祭りは二日間にあたり、中野区の社会福祉協議会と地域で活動する多くの団体・施設・個人が集う祭りだ、オリーバは社会参加と交流を目的に毎年参加し、多くの刺激や地域の方々の協力、あたたかさを頂く大切な行事となっており、インジさんも我々と一緒に参加した。オリーバのメンバーとともに自主製品のクッキーや菓子他の販売をし、覚えたての日本語で「いらっしやいませ〜」と大きな声で来場者に呼び掛けをした。駅前での祭りの宣伝チラシ配布にも率先して加わり、「外国人、私、渡す！」と言って、外国人を見つけると走って行き英語で来場を促し「フランス人、言葉わからない！：」とジェスチャーとカタコトの単語でみんなを笑わせる場面もあった。

オリーバのメンバーで病状による欠如から「ありがとうございます」「大丈夫です」「がんばります」と、三つの言葉だけ独り言のように繰り返すTさんという女性がいる。祭りの二日間、インジさんはTさんに向

かつて、握り拳でガッツポーズを見せ、「Tちゃん、ファイト」と何度も声掛けをしてくれた。Tさんは、その都度うつむいたまま小さくうなずくだけだったが、祭り二日目には「ハイ！がんばります」と少し顔を上げてインジさんに返せるようになっていた。インジさんの明るさでオリバメンバーも二日間の大行事を元気に終えることが出来た。

七月中旬頃、インジさんが外国人用の安いホテルのパンフレットを持ってること気づき聞いてみると、お兄さんの友達が夏休みを利用して韓国から遊びに来て泊まるため、残りの日本でのステイ先は自分で探すように言われたとの事。ちょうどオリバのグループホームのショートステイの部屋が、八月中旬まで空きがあったため、そこを使ってもらう事にした。後日、お兄さんを伴いトランクケース一個運び込み、お兄さんは丁重なごあいさつをして帰られた。インジさんは宿泊代を払うと何度も言ったが「その宿泊代の代わりに、日本語学校とボランティアだけではなく、日本に居る間に観光や旅行、おいしい物を食べる等にお金を使い、もっと日本を好きになって帰って欲しい」と伝えた。

オリーバへのボランティアは八月六日までとし、残りの九日間で花火大会や学校の友達との旅行の計画を始めた。インジさんは、花火大会に日本の「ゆかた」を着て行きたいと言い、みんなでカタログを集めてオリーバメンバーと「どれがいい?」「この色が似合う」「これはどう?」等々、それはにぎやかに盛り上がっていた。

箱根に旅行に行きたいとも話し、みんなで英語のガイドブックを探したり、安い宿泊施設や観光ルートを調べたり、「旅先で困ったら、うと言うんだよ。ここに電話するんだよ。」と、小さい子供が初めて旅をするかのように心配し、あるったけの自分の言葉と知恵と知識で、インジさんの箱根旅行を応援した。

前述したように、病状により自分のことで精一杯のメンバー達がインジさんの旅行や思い出作りに自発的に協力しようとした事は予想外であり、インジさんはオリーバファミリーの一員になっていると感じた。

今までに、ひとりのためにメンバー達がこんなにも気持ちを合わせた事があつただらうか? あつという間の一ヶ月半、この短期間でちゃんと

会話が成り立つほど日本語を習得されたのには驚かされた。その後三日は、三日のはずのボランティアも、ほぼ毎日顔を出され、メンバーと軽作業をしながら、あるったけの覚えた日本語で、コミュニケーションを図っていた。喫茶店作業では、メンバーがインジさんに作業を教える形を取り、メンバーにとっては「教える、伝える」という意味で訓練になり、インジさんも楽しみながら仕事を覚えた。インジさんにホルルの仕事を指示したとき、ただたどしい日本語で「いらっしやいませ。ご注文を伺います。」と接客しているのを、メンバー皆が息を凝らして心配そうに見守った。私は「みんな息をしなさい！ 苦しくないの？ そんなに多人数でジッと見たら、インジさんが緊張するし、お客様だつて変な店だと思つてしょ!!」と言った。緊張したのは、メンバーの方だったのですね！ お客様の注文が聞き取れて、インジさんが「コーヒーひとつお願いします」と言った時、メンバー全員が「かしこまりましたあゝ」と返事したときの「その声」は、忘れることが出来ません。

そして、ついに最後の日がやって来ました。インジさんは、職員、メ



ンバーひとりひとりに、お兄さんに手伝ってもらって書いたというメッセージカードを渡してくれました。私には花束をくれましたが、それは「お仏壇」に供える花でした（笑）。明るく別れようと決め、笑顔で見送りました。

インジさん、あなたが深夜まで日本語の勉強をしてた事を知っています。

あなたが、パソコンで精神障害について勉強してた事を知っています。

あなたが、きれいな食べ物を「おいしい、おいしい」と言って我慢して食べてた事を知っています。

あなたが、目上の人より先に箸をつけたり、席を立たなかった事を知っています。

あなたが、わざと日本語を間違えて、笑いを誘った事を知っています。

あなたが、メンバーの不調を察し肩に手を添えたり声掛けをしてくれた事を知っています。

心の病（精神病）を持たれるメンバーの心の中に、たくさんの方の元気をくれた天使に、心からお礼を言いたい。

ありがとう

（特定非営利活動法人カサデオリーバ理事長）